

---

# 東方国迷譚～擬人化国家が幻想入り～

ライヒ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方国迷譚〜擬人化国家が幻想入り〜

### 【Nコード】

N6347N

### 【作者名】

ライヒ

### 【あらすじ】

日本で開催された世界会議、いつものように終わった会議の後、日本はイギリスが消えたという知らせを聞く。イギリスを搜索しようとして出かけたが、逆に自分が迷ってしまった…。そんな彼がたどり着いたのは、「人」に忘れられた者たちが住む人外の楽園だった。

## 第一話 魔法使いと大和男児（前書き）

注意 この作品はヘタリアと東方のクロスオーバーです。東方が分からない人にわかるように説明してありますが、ヘタリアが分からない人にはわかりにくいかと思われます。なお、作者は東方を紅魔郷しかプレイしたことがありません。なるべく原作に近づけられるように努力しますが、少しは二次設定が出てきてしまいかと思います。

また、作者は学生という身分なので更新が停滞するかもしれません。そこをふまえてお楽しみいただけたら幸いです。

## 第一話 魔法使いと大和男児

皆様こんにちは、日本です。

いや、今日は実にいい天気だと思います。雲ひとつない、という訳ではありませんが、きれいな青空に所々に浮かぶふわわりとした雲。非常に晴ればれとした天気ですね。

そしてその空を寝転がりながら見る私。往来で（まあそれほど人通りも多くありませんが）大の字とは久しくやっていませんでしたから、少し童心に帰った気分です。

しかし。

「も、もう……………一歩も……………動けません……………」

遭難していなければ、もう少し楽しめたのではないかと思  
います。

なぜ、このような事になってしまったのでしょうか。

始まりはそう、私の家で世界会議があったから、だと思います。

会議はいつも通りに踊り、結局まとまらないままお開きに。残りの日数はぜひ観光に使っていただこうとお勧めのパンフレットやツアーなどの手配を始めようと思っていたところでした。

イギリスさんが行方不明になったらしいのです。

なんでも、少しその辺りに散歩に出る、と言い残してそのまま消えてしまったらしく。取っていた部屋には荷物がそのまま置かれていたとのこと。

至急捜索に移ろうとして、私達も微力ながらお手伝いさせていただこうとイギリスさんを探していたのですが、いくら探しても見つからない、それどころか私が迷ってしまった。という、我がことから情けない限りです。

にしても、少しおかしい。

何も知らない他国ならともかく、ここは日本国。本来私に『知らない場所』など存在しないと思うのですが…今いる所は本当に見覚えがない。

まあ、年ですし物忘れがあってもおかしくはありませんね。と少し不思議に思いながら進んでいたところ、目の前に神社につながる階段らしきものが。せっかくですし、イギリスさんの無事を祈る気

持ちでお参りでもしましょうか、と登って行ったのはいいのですが。

まさか、階段がここまで長いとは…。

「こ、腰がああ…」

歩き通しだった老体に階段のぼりというこの仕打ち。普通のご老人なら昇天してもおかしくはなさそうです。普通なら助けを求めたりなんなりするのですが、なぜか携帯は繋がらない。電波が届いていないようです。

そ、そんな！ 電波が届かないのならインターネットにも接続できない、ニコ コにも入れないじゃないですか！！

…ゴホン。失敬。

とにかく、このままでは誰にも発見されぬまま物言わぬ遺体になってしまいます。どうしたものか…。

「なあ」

「え？」

突然の声に思わず疑問を含む声が出ました。身体を起こしてみればそこには10代前半あたりの金髪の少女が。

「アンタこんな所で何やってんだ？ 参拝か？」

思わず固まりました。助けが来たことは素直にありがたい。ですが、ええと、何と言ったらいいか…。その少女の恰好は、つまり。

「……………魔女っ子？」

でした。

東方国迷譚〜擬人化国家が幻想入り〜

なんとその魔女っ子さん（仮）によると、この場所は通常とは少し切り離された所。いわゆる異世界みたいなものでしょうか？

「いや、それはちょっと違っぜ」

その疑問に対しての魔女っ子さん（仮）の答えは簡単なものでした。

「ええと、では、ここは一体？」

「んー、簡単に言うとな。ここ 幻想郷は結界が張られていて、外の世界との関わりが遮断されてんだ。つまり、元は同じ世界で、今も同じ空間にあるが、お互いを知ることとはできない。そんな感じだな」

「はあ…。それはまた大変なお話で」

返事を生半分に返す私ですが、頭の中は全く別のことに捕らわれてました。

だって、魔女っ子ですよ、魔女っ子！

黒と白で作られた服に魔女っ子の代名詞とも呼べる三角帽子、そして箒。どこからどう見ても欠点のない魔女っ子です。素晴らしい！

「私達の所だとかこういう「外」の世界から人が来ることは『幻想入り』って言うぞ」

「幻想入り…ですか」

魔女っ子さん（仮）のお話を聞いていると、どう考えてもふらつとは迷いこんではこれなさそうな所。どうして私が入ることが出来たのでしょうか？

「しかし、入ろうとすれば結界に弾かれてしまうのでは…どうやって私は入ってこれたのでしょうか…」

「アンタが非常識だったからじゃないか？」

「……………オブラート、という言葉の意味を知っているのでしょうか？ この方は。」

「……………私といたしましては、常識人、だったつもりなのですが？」

「あ、違う違う、そういう意味じゃなくてな」

なんでも魔女っ子さん（仮）いわく、幻想郷に張られている境界は常識と非常識をより分けているらしく、「外」の世界での非常識は幻想郷では常識、反対に幻想郷での非常識は「外」の世界での常識とことです。

「だから、この中に入れるのは「外」で言う非常識な奴ら…たとえば妖怪とかな」

「妖怪…ですか」

昔はよくいたといわれていますが、私は”多分”見たことはありませぬねえ…。

「もちろん普通の人間もいるけど、そういうのはここに昔から住みついてた奴らだけだな」

「おや、人間の方々もいるのですか」

「おう。で、アンタも幻想入りで来たってことはそれなりに非常識ってことなんだよな。空が飛べたりとか魔法が使えたりとか変化できたりとかしないか？」

「そ、それは少し…」

しかし、そんな言葉が普通に飛び出てくるといふことはここにはそんな力を持った方達がたくさんいるということなのでしょうか…？…二次元に迷い込んだ気分です。

しかし、非常識…私個人としてはそのようなこと考えたこともあ

りませんでした。が、国という存在はやはり非常識なんでしょうか…。

「でさ、最初に戻るけど」

「はい？」

「こんな所で何やってんだ？」

「あ」

そうでした、すっかり忘れていました…。

「私はこの先に神社があると知って少し参拝しようと思って登ったのですが…石段の時点でギブアップしまして」

「へえ、珍しいな」

「……………」

それは、ギブアップするほど体力のない人が珍しいのか、それとも参拝目的にこの石段を登ろうとする者が珍しいのか…。

「ま、詳しい説明なら上にいる奴がやってくれな」

## 第一話 魔法使いと大和男児（後書き）

ついやってしまいました…。この作品は別にやっている二次創作の息抜きに執筆しているのとどこどころガタガタですが、お楽しみいただけたら幸いです。

## 第二話 巫女との邂逅（前書き）

霊夢の口調が分からなくて悪戦苦闘。結局クールな感じになりました。これは違う、ここはこうした方がいい。という感想ありましたらどしどし連絡を。感想どんどん受け付けます。

## 第二話 巫女との邂逅

突き抜けるように清々しい空、神社の境内に一人の少女がいた。

彼女の名は博麗靈夢<sup>はくれいれいむ</sup>、この幻想郷に住まう巫女。

「ふう……」

竹箒が石畳を滑る音がする。掃除は靈夢の日課、掃除をした後お茶を飲みながらやってくる知り合いと世間話をしたり、そしてたまに起こる異変を面倒臭げに解決する。というのが靈夢のライフスタイルとなっていた。

しかしだ、

「暇ね……」

そう、暇なのだ。いくらたまに異変があっても基本神社は年中無休、しかしめったに人が来ないこの神社では年中で無休どころかむしろ毎日が休日のようなものだ。少しくらい来ても良いものを、結局今日も賽銭箱は空っぽなのだ。

（いつもはこのくらいの時間に頼んでないのに魔理沙<sup>まじな</sup>が来るはずなのに、今日はなかなか来ないわね）

そう思った時、入口の石段辺りに何か白黒の物体が飛び込んできた。飛び込んできた、と言う表現なのはそれがかなりの速さで飛んできたから。

「魔理沙ね」

一発で断定。白黒だし、箒持ってるし、何より空を飛べるという時点で絞られてくる。

「よっ、霊夢」

ふわりとスカートを翻し箒の上からフランクに挨拶する魔理沙。

霊夢は箒の上に視線を向け、箒に同乗している珍しいものを見つけた。魔理沙の操る高速移動の箒に乗ってきたせいかなり顔が青い。

「いきなりなんだけどな、厄介事いるか？」

「内容によるけど」

東方国迷譚〜擬人化国家が幻想入り〜

ぐったりと畳の上に寝そべる青年。名前を聞き出そうとしたが乗り物酔いと腰痛でダウンしているために結局まともな情報は聞き出せなかった。せいぜいわかることといえば外見くらい。

見た目はそれなりに若い、黒髪をまっすぐに切りそろえていて、顔が少し青いのは乗り物酔いのため。身長は霊夢の視点からでは高いが、もともと霊夢はそれほど身長が高くはない、せいぜい幻想郷の人間の平均より高めぐらいだろう。

「はい、お茶」

「あ、ありがとうございます…」

お盆に乗せたお茶をふらふらと起き上がった青年に渡すと控えめに礼を返される。お茶を飲む動作は長年の経験を感じさせるほど流麗、何よりお茶を飲んだ後の一安心した顔は少し老人じみた貫禄を感じさせる。見た目に反して意外と年をとってるのかもしれない。

「霊夢ー。私には？」

「まずはお賽銭、話はそれから」

ケチだぜー、と呟く魔理沙は無視。霊夢は目の前の青年に向き直る。

「だいたいの話は魔理沙から聞いたけど、外来人らしいわね」

「あまり実感はないのですけどね…」

苦笑しながら青年が答える。青年はですが、と前置きして。

「人ではないものがここに入れる資格ならば、私と他にも入れる方はいるかと」

「……要するに、あなたは人間ではないってこと？」

コクリ、と青年が首肯する。

「何と申しましょか……。私は人ではないですが、貴女方の言う妖怪という存在でもないです」

青年はそこで言葉を区切る。言葉を選んでいるような、言うか言わまいか迷っているような。

「日本、という存在をご存知ですか？」

「幻想郷の外の国よね、詳しくは知らないけど」

「はい。しかし、あなたの言う『国』とは政治的に支配されて区切られた領域、という認識ですよね」

これに首肯。国云々の事など詳しく考えたことはなかったが、大まかな所はそんな感じだろう。

「しかし、実を言うとそれとは違う【国】というものが存在するのです」

「……」

「それが私です。『国』が生まれた瞬間に同じように生まれた【国】

、日本国と申します。…ちなみに人間としての名前もあって、そっ  
ちでは本田菊といいます」

畳の上に正座して折り目正しく礼をする青年。

青年の説明はどうも要領を得ず、逆に教える気あるのかと問いた  
くなるような内容だ。しかし、顔だけは真剣そのもの。眼の中には  
少し不安と戸惑いの表情が表れている。

多分この青年がここまで回りくどい説明をするのは、今まで自分  
の存在に疑問を持たれたことなどなかったからだと思う。幻想郷が  
『外から見て』非常識なら、『幻想郷から見て』外は非常識なのだ。

あつちでは常識、いちいち説明する必要もない。そういう存在な  
のだろう。だから霊夢もそう思うことにした。もとより、それほど  
興味もない。

「なるほど、あなたの存在についての説明はついたわ。問題は、ど  
うしてここに迷い込んだのか」

「人を探しているんです」

言葉は簡潔。しかし簡潔ゆえに情報が少ない、故意なのか、それ  
とも無口なのか、必然的に聞き返す必要が出てくる。

「人とは？」

「私の知り合いで、私と同じ存在の方です。名前はイギリスさん、  
人間名としてはアーサー・カークランドという名前です」

その後の説明によると、彼のような存在が多く集まる会議があつて、その会議は今回日本で行われたとのこと。そして会議の後に件のイギリスが姿を消した。搜索していたらここに迷い込んでいたということ。

「本来ここに来るつもりはなかったのですが…万が一ということもありますし、しばらく搜索しようと思います」

「あてはあるの？」

「残念ながら…」

少し困った表情で苦笑する青年。しかし、あてはないのに探すときた。これは幻想郷を知らないからこそ言えることだろう。

幻想郷には人間が入れない地域も多い。妖怪の根城となっていたり、うっかり入るうものなら迷って出られない所もある。夜になれば別世界だ。正直言って、夜に出歩く人間は襲われても文句が言えないのが暗黙のルール。

「幻想郷でスペルカードルールも知らずに出歩くななんて不可能よ、ましてや人探しなんて絶対に無理」

「ですが放っておくわけにもいかないのです。それに私が帰らなかつたら他の方も心配しますし…」

「そこまで言うなら止めないけど、最悪死ぬわよ」

「……………」

霊夢はにべもなく、しかし青年は引き下がらない。話し合いは平行線、一向に終わる気配を見せぬまま時間だけが不毛なまでに過ぎていった。

実を言うと、日本には一つ懸念している事があった。

もしイギリスがここに来ていたとしたら。幻想郷は自分達の世界の人間からだと感じできないらしい。つまり、どれだけ捜索隊が探してもここにいる限りは絶対みつからない。

しかし日本もイギリスも国としての重責を担っている、ずっと不在では上司に対する示しが見つからないし、なにより【国】がいなくなったとなれば国民や国土、経済にどんな影響があるかわからない。

そして日本は普通にここに入れた、つまり他の国もここに入つてこられる可能性を持っているということ。要するにこのままでは自分達を探しに他の国が入ってきて、さらにそれを探すために他の国が入ってくるということだ、

（このままだと、ミイラ取りがミイラ状態で国家大量失踪事件が発生します…!!）

ああ、自分が当事者じゃなかったらすごく見たい！

まあ、そんな自分の事情はともかく。

「そこをどうにかできないでしょうか？」

「何度も言ってるように、幻想郷を普通の人間が一人だけで行動するのは無理よ。貴方は普通の人間じゃないみたいだけど妖怪より強いという訳じゃないでしょう」

拒絶。しかし諦められない。

「ですが、このままだとこちらと同じくそちらも困ることになってしまうと思うのですが」

「よしんばそれで異変が起きたとしても、異変を解決するのが巫女の仕事よ。問題ないわ」

否定。だが食い下がる。

「しかし……」

そうして言葉を交わすこと数十分。よくぞここまで粘れたものと自分でも思う。いつもなら周りに流されてすぐやめてしまうのに。

心の中で思う。……私は何のためにここまで頑張っているのでしょうか？

イギリスさんを探すため？ それだったら他の国もやってきた方が効率よく探せる。3人寄れば文殊の知恵というが、仮にも長い時を生きてきた国たちだ、それが集まればここで一人悩んでいるより上手く事が進む。…彼らが団結するかどうかは置いておくが。

問題を広めないため？ 問題が広がる＝自分の立場が危うくなる、

だ。確かにそれなら頷ける。面倒事が起きるとお鉢が回ってくるのは自分だ。のらりくらりとかわせるほど器量はよくないし、何より自分の国で起きた事態。そう簡単に終わりにすることはできないだろう。

だが、だが違う。何か引つ掛かるのだ。上に挙げた問題以外に何か。自分の根底に関わるような。

(……?)

しかしわからない。そこだけがわからない。もやもやとした霧のようなものに包まれているような感覚。どこか、遠い昔に。

「霊夢」

今まで話に入らなかった魔理沙の声で我に返る。いつの間にもやらずいぶん考え込んでしまったようだ。

「何、魔理沙。今忙しいんだけど」

「要するにさ、そいつはどうしても人探しがしたいんだろ？ でも幻想郷を歩きまわるだけの力がない」

「そうよ」

「じゃあさ、ガイドがいれば良いんじゃないか？」

は？ と時が停止する。ただし、日本だけ。霊夢は少し驚いていたようだが、すぐに合点が言ったらしく話に帰還した。

「誰か力のある奴に護衛兼ガイドを頼んで、幻想郷を案内してもらおう。それでそつちが人探しをしている間に起こった面倒事はその力のある奴に解決してもらおうっていうのは？」

「そうね……確かにそれなら問題ないわね」

「だろ？」

「でもその護衛は、…どうせ頼まなくても魔理沙がやるんだろっけど」

「その通り。面白そうだしな」

会話に入り込めないまま、日本の意図しない方向にとんとん拍子で話が進んでいく。

「ちょ、ちょっと待ってください！ 確かにどうしてもとは言いましたが、流石に他の方に迷惑をかけるわけには…！」

「でもここで話を進めないと貴方絶対に引き下がらないでしょう？ 私としてはそつちの方が迷惑よ」

「う…」

霊夢に言われ、思わず黙ってしまふ。

しかし、自分一人で動くのならともかく、他の人と行動を共にすると考えるとたんに気が進まなくなってくる。別に行動を共にする相手が気にいらないとかそういう意味ではない。ただ単に、上手

くやっついていける自信があまりないからだ。

しかし、主張していかねければあつという間に置いてかれる。それは現実の世界だけではなくここ幻想郷でもそう。

「「じゃ、決まり（ね）（だぜ）」」

「は!?!? あ、あのー……」

「「何か?」」

「……………いえ」

振り返った霊夢と魔理沙のものすごくいい笑顔に、思わず何も言えなくなる日本。いつの時代も、女性は強い。

「じゃ、改めて自己紹介しようぜ」

畳から立ちあがった魔理沙の言葉で気づく。そういえば自分は今まで状況の確認に忙しくて全くと言っていいほど自分自身の紹介をしていなかった、と。礼に始まり礼に終わる日本人としてなんたる失態。

「私の名前は霧雨<sup>霧</sup>魔理沙<sup>理</sup>。気軽に呼んでいいぜ」

「私は博麗<sup>はくれい</sup>霊夢<sup>れいむ</sup>よ。ここの神社で巫女をやってるわ」

「え、あー……。霧雨さんに、博麗さん、ですか。……そうですね。

では、改めて。日本、と申します。短い間になるかもしれませんが、どうぞよろしく」

「「ゆるしへ」」

「こうして、彼の幻想郷での冒険譚が始まったのであった。

## 第二話 巫女との邂逅（後書き）

・せめてものキャラ紹介、今回はヘタリア編

日本（本田菊）

A x i s   p o w e r s   ヘタリアの登場人物。人間名は作者がブログで「もしヘタリアの登場人物に人間らしい名前があったら」という質問に答えた時のもの。

真面目で大人しく礼儀正しい武士の国。だが島国独特の文化の発展により周りからは「何を考えてるかよくわからない」といわれる。

特技は空気を読むことと遠慮する事。しかしこの話では遠慮してたら始まらないので結構どしどしいくよ！

昔引きこもっていた時期もあり、その折にはアメリカに開国させられた。

普段は穏やかで怒ることはめったにしないが、食べ物関連では別。

季節の移り変わりをこよなく愛し、風流を粹とする。

以下、オリジナル設定

人探しをしていたらうつかり幻想入りしちゃった。しかし漫画みたいな世界はそれほど嫌ではない様子。むしろ少し楽しんでる。

幻想郷の事はさっぱり忘れてるみたい。しかし心の奥底でどこか

引っかけてる辺り完全に忘れ去ったという訳ではない様子。

### 第三話 寺子屋教師と亡郷心（前書き）

サブタイトルが思いつかなかったので超絶適当です。

あと、自分として納得いく仕上がりではないのでもしかしたら変わるかも。

### 第三話 寺子屋教師と亡郷心

「じゃ、そろそろ行くぜ」

「え？」

自己紹介の後、全員でお茶を飲みながらまったりとした一時を過ごしていた日本の耳に、あまり嬉しくない一言が混ざる。

「だって急いでんだろ？ だったらそろそろ行かないと」

「あ、あー……」

思い出すのは少し前。腰痛により動けなくなった日本に魔理沙が言った一言。

『だったら乗ってくか？』

魔女の箒に乗れることなどめったにないので喜び勇んで乗せてもらったのは良いが……あのスピードは反則だろう。正直、友人の車の運転と同じものを感じた。

あれを体感してもっと安全な車を作ろうと思ったものだが、箒の

場合は筭自体より持ち主の方に問題がありそうだ。

……よく考えたら、車の技術が向上した現代でも彼の車の運転は向上したのだろうか？

しかし、ここにくるまでの少しの道のりだけでもあそこまで凄まじかったというのに、これで長時間乗ったらどうなるのだろうか？

……想像したくはない。

「あの一、霧雨さん」

「ん？」

「歩いて行った場合は」

「日が暮れるぜ？」

「…そうですね」

無理。却下。時間をかけていられないのは明らかだし、よくよく考えると歩く気力がない。

(……………腹をくくるしかありませんね)

願わくば、安全運転が望ましいのだけど。

東方国迷譚〜擬人化国家が幻想入り〜

神社の境内。鳥居の前で魔理沙の箒に乗ろうとしていた日本が、  
霊夢の方に向き直った。

「博麗さん。本当にお世話になりました」

「いいわよ別に。魔理沙みたいに毎日来る訳じゃないしね」

すげなく返す霊夢を見ながら、日本は薄く笑う。この巫女、かなりあっさりした性格というか、あまり他人に興味を持たないというか。空気を読むのは日本の十八番。彼はこの短時間で霊夢の性格を  
だいたい把握していた。

この場合は、流すのがいいのだろう。あまりうだうだとしてても  
鬱陶しがられるだけだ。

「はい。それでは」

「……あと。神社こゝには結構いろんな奴が来るから、たまに来てみる  
といいわ。もしかしたら探し人の情報もあるかも知れないし」

去り際に背中に掛けられた言葉に、日本の笑みがさらに深くなる。  
久しぶりだ、ここまで穏やかな気持ちなのは。

……まあ、エンジン全開今にも発車しますみたいな魔理沙の箒

にこれから乗ることを考えると、ただ単に少し意識が飛んでるだけなのかもしれないが。

「じゃ、いつくぜー！」

気合の入った魔理沙の声と共にこちらも気合を入れなおす。ふふん、今回は前とは違う。2000歳の爺をなめるなよ。しかし、その瞬間に脳裏にポツリと。あ、そういえば再会の約束してない。

そう考えた途端に人（まあ、自分は国だが）とは不思議なもので。思わずくるりと霊夢の方を見てしまう。そしてそれが命取り。

「あ、ではまたいつかあああああああ！？」

霊夢の視界からいきなり日本の姿が消え、ドップラー効果と共に声が遠ざかってゆく。彼方を見れば黒い点が一つ、多分あれだろう。

「……………」

完全に見えなくなった所で霊夢はポツリと。

「……………あ、お賽銭入れてもらっつうの忘れたわ」

「こちらは日本。ただいま死にかけている。」

唐突に景色がブレ、おそらく慣性の法則的なもので身体が後ろになぎ倒された。慌てて振り落とされないように態勢を立て直すと、つい先程までいた神社ははるか遠く。

ただ、日本はそんなことを落ち着いて考察するだけの余裕がない。

「きつ、ききき霧雨さん！！ は、早いです！」

「にほーん！ まずはどこに行きたい！？」

「そ、その前に速度を落としてくださいいい！！」

「えー！？ なんだってー！？ 風で聞こえないぜー！！」

「そ、速度を…うっ」

「じゃ、適当に人里にでも行くぜー！！」

「……、」

形容するなら、シートベルトのないジェットコースター。

まっすぐ進んでいることはいるのだがあまりの速度に体が浮き上がりそうになり、それを押さえつけると今度は重力の力がやってきて箒に身体が押し付けられる。実を言うと先程の出發で腰が痛い。

せめてものごまかしで箒にしっかりとしがみつくと、出来れば魔理沙にしがみつきたいものだが、流石に男として女性の腰に無断で手を回すわけにはいかない。

正直に言おう。誰か助けて。

しかし虚しくもそんな日本の願いは届くはずもなく、これからしばらくこのとんでもなく心臓に悪いアトラクションはしばらく続くのであった。

終わり

「　　って、終わらないでください!!　　……………あれ?」

絶叫マシーンの悪夢（現実だが）から目が覚めた日本が見たものは、自分には非常に慣れ親しんだ畳と布団。ここは一体どこなのだろう?

「ああ、起きたか」

「え?」

声の方を振り返ると、青系の服を着た女性。特徴といえば頭にある家のような形をした帽子だろう。どことなく昔中国で見たものと

デザインが似ている気がする。

「随分の間気を失っていたからな、もうしばらく休むといい」

「はあ…。あの、貴女は？」

「私か？ 私は…」

「けーねせんせー！」

子供特有の軽い足音と共にズバーン！ と中々の勢いで障子が開けられる。そしてそこから着物を着た子供たちがわらわらと。

「おきやくさまおきたー？」

「ああ、起きたが…あまり騒いではいけないぞ？」

「「「はーい！」「」」

子供たちに苦笑交じりに説教をする姿はなんとというか、良き先生という感じで、思わず聞くタイミングを逃してしまった。…それでも騒ぐ子供達の方から聞こえてきた頭突きの音は、気にしない方が良かったろう。

(……………)

胸に去来する気持ちはとても曖昧で区別がつきにくいけど。

(……………懐かしい、ですかね…?)

どこかで見た光景、今はない光景。だからこそ懐かしいという言葉が一番似合う。

本当に、ここには自分が置いてきたものがあふれていると思う。これだって昔はそこかしこで見れたはずなのだから。

捨ててきたものに郷愁を想うのは、間違っていることなのだろうか。

「すまないな」

「いいえ」

子供たちの元気な遊び声をBGMにしながら、日本と先程の女性は隣り合って座っていた。

「改めて、私は上白沢慧音かみしろさわけいねと言うものだ。君の事は大体魔理沙から聞いた」

「あの、それでその霧雨さんは？」

「彼女は少し事情があつてな…人里案内は私がすることになった」

「成る程」

その「事情」は何かは知らないが、あまり聞かない方がいいのだ

ろう。なんとなくカンでそれを感じ取った日本は早速本題に入るところに。

「失礼ですが、私の「事情」とは何処まで？」

「そうだな、まず、君が外の人間であること、人探しのためにあちこちを回っているということ、そしてその探し人の情報くらいだな」

(……霧雨さんは意外と詳しく説明してくれていたようですね)

魔理沙の意外な細かさに少しだけ驚きながらも、慧音にその先を促す。

「まず結論から言わせてもらうが、私の知る限りでは今の所人里に外来人が来たということはない。一応周りの者にも聞いてみなければわからないと思うが……」

「……そうですか」

ここにも来ていない。それを知った日本の顔が少し曇る。

それを見たからかどうかはわからないが慧音は少し考えた後、やがて何かを思いついたらしく、ぽん、と手を打つと、

「ああ、そういえば噂程度だが……」

「なんですか!？」

先程の落ち込みようから一転、あっという間に立ち直った日本を見て慧音は少し驚いていたようだが、日本は構わず続ける。その勢

い、年2回夏と冬のオタクの祭典のごとく。

「あ、ああ…なんでも、この間知り合いが迷いの竹林で不思議な人物を見たらしくてな…詳しくは聞いていないが」

「迷いの…竹林？」

ああそういえば説明がまだだったか、と慧音を取り出したのは一枚の地図。

「この幻想郷にある地名の一つで、その名の通り一般人が入ると出れなくなる。一応案内役がいるのだがな」

「そのような場所に…」

慧音いわく、世間話と同じような感覚で話していたらしく、詳しいことはその知人に聞いてみなければわからない…とのこと。

「その御友人は今どこに？」

「すまないが、それはわからなくてな…。おそらく、数日後には戻ってくると思うが…」

少なくとも数日後。

「し、しかしそれでは……………」

「ふむ…」

焦る日本に対して慧音は落ち着き払った表情で返答する。

「少し思っていたことなのだが、君は少し焦り過ぎている感覚がある。…時には一歩下がることも重要だ」

「う…」

…確かに、そう言われるとそうかもしれない。と日本は少し思案する。

「それに君は今疲れているだろう。ここに来た時もすぐに倒れていたしな…少し休むのも良いと思うぞ」

おもに倒れた原因は石段登りと魔理沙の箒なのだが、そこらへんの事情は慧音にはわからない。

しかし休めるならそれに越したことはない。ぐらぐら揺れる日本の心。そこに追い打ちをかけるように慧音は一言。

「なんなら今なら3食保障の上に寝る所もつけてしかも無料だが？」

「休みます」

「よろしい」

先程までの躊躇はどこへやら、おそらく最大のセールスポイントは「無料」だろう。世の中、タダより安いものはないのだ。

(……しかし、)

この調子で自分は本当にイギリスを見つけることができるのか、

心配で仕方ない。それはまさしく神のみぞ知る、という所だろう。

さて、ひとまずこのお話はこれでおしまい。視点は変わり、新しい物語を探し求める。

「……………ここ、何処あるか」

ここより遠くて遠いどこかの狭間。そこから新たな物語の気配。

…はてさて、どうなることやら。

### 第三話 寺子屋教師と亡郷心（後書き）

やってしまいました…。

この小説、意外と視点とかころころ変わったりします。ほぼ同時進行ということ。

さて、次の主人公は誰でしょう？ …といっても、わかりやすいですが。

#### 第四話 兎と中華と竹林と（前書き）

初登場のキャラだらけ。そして性格が解らない。…もうほぼオリキ  
ヤラでいいのではないかと思ってきました。

## 第四話 兎と中華と竹林と

二一八才！ 中国あるよ！

突然あるが、我は今どこにいるかわからないある。

「……………あら、不満そうな顔ね」

当たり前ある！ 商売してたらいきなり落とされて…、こっちは  
たまったもんじゃねえあるよ！！

「それについては謝罪するわ」

どう考えても謝罪してるようには見えねえあるけど…。

それに何あるか、その傍らに引き連れてる化け狐と化け猫は！

我に対するあてつけあるか！

「そんなつもりは無かったのだけど…。二人ともいい子よ？」

そんなことは聞いてねえあるよ…。 まあいいある。このまま  
だったら話も進まねえあるし、聞きたいこともあるある。

「それは助かるわね、正直、貴方は面倒な性格に見えたから」

……後で覚えてるある。

まず、我をここに招待した理由を吐けある。

「貴方は一筋縄では行きそうになかったから……というのが理由ね」

どんな理由あるか…。

「『彼』みたいに今でも幻想の中で暮らしている者や、『彼』のように元々こと深いかかわりを持っていた者は意外と簡単なのだだけ。貴方のように自分の「国」に古い歴史を持っていると抵抗力のようなものがあるみたいでね。しょうがないから私のスキマ経由で行ってもらおうと思って」

……行けってどこにあるか？

「入れば解るわ」

答えになってねえあるよ！ それに、『彼』って誰あるか!？

「まあまあ。大丈夫よ、帰れないわけではないし、それに「思い出す」のも時には重要な事よ?」

お前はもう少し、人の話を聞くあるよおおおおおおお!

「…幻想郷一名様ご案内、ってね」

東方国迷譚〜擬人化国家が幻想入り〜

体が投げ出された。

「あゝ…、今度は覚えてるあるよ…」

「ごろりと、寝転びながら空を見上げる。頭上は忌々しいくらいの青い空。そしてそれを彩る竹の緑色。」

竹林とは、また懐かしい場所に飛ばされたものだ。と中国は思う。

「……流石に大熊猫パンダはいねえあるよな？」

流石にいない…とは思いたいが、どうもまともな場所に送られたとは考えにくい。ヘタするとパンダどころかモンスターが出てくるのではないだろうか。

……。

ちよつと心細い。

「……ま、まあ大丈夫あるよ！ 何か出てきても我の太極拳でぼつこぼつあるからね!!」

誰に向かって話しているのだろうか。

とりあえず立ち上がり、辺りを見回してみると、やはり竹林。それも人の手が入った様子は全くなく、かなり自然に近いままの状態だ。

「なかなか深そうあるね……。ちゃんと出れるあるか？」

竹林というのは迷いやすいもの、景色にあまり大きな特徴がないからだ。しかもこの様子では人はいなさそうだし、ここにいたままではまずいだろう。

さて、どうするか。

「とりあえずあちらこちら動くと思わかんなくなりそうあるね……。何かここに目印を置いておけば……」

しかし、目印にできるようなものあったらだろうか。

少しだけ考えて、やがてハッと体を固まらせる中国。しかし首を振って否定する。

「だ、ダメある……シナティちゃんは、おいていけねえあるよ……」

なにやらどこかで見たとのことのある猫(?)のかぶり物を持ちながら唸る中国。置いていく、というのはすなわち捨てるということだ。

もし、もし、ここに置いて行ったらきつと可愛い可愛いシナティ

ちゃんは雨ざらしの風ざらし、そしてだんだん汚れていき最後にはポロ雑巾のように…。

「あ、アイヤー！」

最悪のビジョンを想像して頭を抱える中国。ふと胸元のシナティちゃんと目があつた。

こうしている今もつぶらな（死にかけた魚のような）瞳のシナティちゃんはじつと中国を見つめているのだ。その眼は暗にこう語っている。中国、本当にこんな所に置き去りにする気アルよ…？と。ああ！ そのような事、できるはずがないではないか！！

「さ、させねえあるよ！ たとえ何があるつともシナティちゃんは離さねえある！！」

ひしっ、とかぶり物を抱きしめ泣く中国。はたから見ればコント以外の何物でもないが、本人は真剣だ。

「ううう…、…ん？」

その時、ちらり、と不思議なものを見た。

なんとというか、うさぎっぽい。というかうさぎなのだが、うさぎにしては耳のサイズが少し大きかったし、そもそもここまで竹や草が生い茂る竹林ならうさぎなんて見つけられるはずがないのに。

「……、」

その後もうさぎの耳がチラリ、チラリと。何なのだろうか、隠れ

ているつもりなのだろうか。

「……」

スタスタスタスタ、と無言で歩み寄る中国。そしておもむろに茂みに手を突っ込むと一気に目標を引きずり上げた。

「……何あるかこの妖怪うさぎは」

「あらら、見つかったか」

「見たらわかるある」

ぶらりと襟首を掴まれて吊り下げられながらもケタケタと愉快そうに笑う妖怪うさぎ。

ふわふわした耳に尻尾、ピンク色のワンピース。外見は幼い少女と言った所だが、はてさて、見た目通りというわけではないのだろう。

「いやさ、話しかけようと思ったんだけどね？　なんか忙しそうだったし、どうしよっかなーって思ってたさ」

「だからと言って覗いていい理由にはならねえあるよ。何か用あるか？　うさぎは大人しく月で薬練ってればいいある」

私地上のうさぎなんだけどなー…などと呟きながら頬をふくらます妖怪うさぎ。月のうさぎに縁でもあるのだろうか、その表情を見る限りあまりいい関係とは言えないみたいだが。

「あんだ外来人でしょ？ さっきいきなり出てくるの見たし」

「ここがどこかは知らねえあるが、多分そうある。出口知ってるあるか？」

「んー、出口ではないけど、竹林（こ）の案内をすんのは私だよ。よければ案内しよっか？」

妖怪うさぎの問いかけに中国はしばし思索する。出れるというのならそれに越したことはないが、このうさぎの言うこと、果たして信用していいものか。

なんといったらいいものか、あくまでも勘だが、信用できない。言葉の端々に人を騙そうとするような…有り体（あ）にいえば詐欺師のような匂いを感じるのだ。

しかし、そうでもしなければここから出られそうにないのも事実。のるかそるか、判断に迷う。

「……………いいある。案内するよろし、妖怪うさぎ」

「妖怪うさぎじゃなく、因幡（いなは）てゐって呼んでほしいね」

このうさぎ、「人間を幸運にする程度の能力」というものを持っているらしい。普段はそれを使って人間を竹林の外に出しているらしいのだが…。

「だーからー。もう能力は使ったからいい加減離して欲しいんだけどなー！」

「お前は「案内」って言ってたある！ だから最後まで案内するよるしー！」

「ちょ！ 耳引つ張らないでよ！！ うさぎの耳掴むなんてこの常識知らずー！」

今の状況を分かりやすく言うと、暴れているてゐ。そしてそのてゐをズルズル引きずっている中国。

何でも中国いわく、「案内するとか言っついて幸運渡してハイおしまいなんて認めないある！ ちゃんと最後まで案内するよろし！」との事らしい。

しかしてゐいわく、「能力を使って幸運を与えたんだから案内する必要なんてないじゃん！ 普通に行けば出られるよ！」との事。

「それに詳しい説明がまだあるよ！ きつちりしつかりすっぱり説明するあるー！」

「なんで私がそんなこと……！」

「、内容によってはチップもやぶさかじゃないある」

「ー！」

ぼそり、と呟かれた言葉にてゐの耳といわず体全体がピンと立つ。

それを見た中国はなにか自分との親近感を感じつつ話を進める。

「内容の重要度に対して値段は変わるあるが、いまならそれなりの報酬があるある」

「む、……………しょうがないな」。ちゃんと払ってよ?」

先ほどとはうって変わって、いきなり協力的になるてゐ。もっとも、中国は幻想郷の紙幣と自分の持っている紙幣が同じなのはよくわからない。しかし、このてゐの様子を見るに、おそらく貨幣の価値云々ではないのだろう。

彼女の眼は詐欺師の目だ。というのがかつて数多の国と渡り合ってきた中国の談。なんとというか、利益を得ることより人を騙す事に喜びを感じていそうなのだ。

つまり、気をつけていないとあっという間にむしり取られる。

(……………あまり我をなめんじゃねえあるよ…!)

いくら長生きな妖怪とはいえ、こちらも中国4000年の歴史を持つ長寿国、最近周りから年の事について言われるようになってきたが自分はまだまだ現役だと言い続けてン十年。その経験からの観察眼をなめるなよ!

そして、食えない奴だと思っているのはてゐも同じだった。

初めて見た時から思っていたが、この人間(?)見た目に反してかなり老成している。大体が大体で幸運貰っただけじゃ納得できないと耳を掴むような人間初めて見た。この竹林で迷ったもの特有の

疲れた感じがないというか、やはりもう少し迷わせてから話しかけるべきだったか。

まあ、変なかぶり物抱きしめて泣く姿を見た時何やってんだと思っただのは事実だが。

しかし、ここで引き下がるようでは因幡の名が泣く。

考える、おそらく相手はてゐの性格と行動を何となく予測しているのだろう。つまり、それほど多くの相手を見てきたか、自分にも似通った所がある。ならばそこを叩け、傍目では釈迦の手のひらの上で踊る孫悟空のように、しかし巧妙にその手のひらからすり抜ける。踊らされているふりをして、最後の最後に予想を覆せ。

(…………完膚なきまでに騙してあげるよっ！)

今ここに、自分のアイデンティティをかけた戦いが始まるっ……………！

「……………何やってんのかな」

そして見えない所で炎を燃やす両者を外から眺めているのが、月からきた玉兔。名前は、れいせん鈴仙・うごんげいん優曇華院・イナバ。

てゐとの違いは不思議な形状の耳。うさぎの耳なのだが、てゐがふわふわとした普通のうさぎ耳なのに対してなにか妙によれよれの一見すると作り物みたいな耳だ。根元のボタンが非常に怪しい。

さて、てめを探しに来て見つけれられたのはいい。そのてめの近くに不思議な外来人がいたのも百歩譲っていい。あまり人と関わりたくはないが、竹林の外に案内するのはいいと思う。

しかしだ。なんなのだ、この少年漫画の如く煮えたぎった空気は？

なんとというか、相手が相手を好敵手ライヴァルと認めているからこそこの空気。もしや自分が気づかないうちにあの二人のテンションの波を操ってしまったのかと思うほどだ。

「……………どうしようかしら」

話しかけるか、かけまいか。

なんとなく、このまま話しかけたらこの二人は自分をはさみながら戦ってそうな感じがしそうだ。それはすごく嫌だ。実際何をかけて戦ってるのかはともかく。

しかし、話しかけなかったらずっとこのままな感じがする。それは困る。

「……………」

……………どうしよう。

悩む鈴仙、火花を散らすてめと謎の外来人。

「……………はっ。そ、そういえば外来人が近くにいることはお師匠様に教えないと……………」

てゐならそのまま外に出してくれそうだが、言う事を聞かないあの子が何をするとも限らない。そう思った鈴仙はそつとその場を後にすることに決めた。決して逃げるためではない、ためではない。たらためではない。

しかし、運命はかくも非情だった。

「…！ そこに誰がいるあるか！！」

「うわあ！？」

なんとてゐではなくあの外来人の方に気づかれてしまったのだ。いくら能力を使ってなかつたとはいえ一生の不覚。いや、問題はそんなことではない。

「あれ？ 鈴仙？」

やっと気がついたらしきてゐるが驚いた声を上げる。というより、てゐより先に気づくなんて何者だあの外来人。

「…お前もこの妖怪うさぎの仲間あるか」

「ナイスタイミングだね、鈴仙」

その時、外来人とてゐの顔に浮かんだ笑みを鈴仙は見逃さなかつた。人は言う、あれは騙す目だ。おそらく、てゐの視線は面白いのが来た。外来人の視線は御しやすいそうな奴が来た。といったところだろう。

「うっ……」

これから起きるであろう騒動に、またそれによる心労を考察してそつと涙を拭う鈴仙。言えるものならいいたい、不幸だ、と。しかしいくら主張した所で幸運が舞い降りてくるわけでもなし、ただむやみに落ち込むだけなのだった。

鈴仙、君に幸あれ。

#### 第四話 兎と中華と竹林と（後書き）

にーにはきつとがめついかから詐欺には敏感だと思つのです。

てるとにーにはどちらが年上なのでしょう？

そしてレイセンはいじられキャラ。

せめてものキャラ紹介

中国（王耀）

Axis powers ヘタリアの登場人物。人間名は作者がブログで「もしヘタリアの登場人物に人間らしい名前があったら」という質問に答えた時のもの。

こうみえて結構爺さんつていうか仙人か何か。兄貴風吹かしてるけど色々セコイせいか全然兄貴扱いしてもらえない。しかし年上なので財布がさびしくてもやたらなんか奢りたがる。

ちっちゃいころの日本を育ててたのが彼。だが日本は彼を兄と思つてはいなかったようで。ちなみに初めて日本を見つけたのは竹林で。

世界中に別荘を持っている。が、韓国にはない。

得意なのは料理と拳法。

美人画とかは非常にうまいのに、キャラクターを描かせるとどこかで見たようなになる。

普段結構テキストだけど数年に一度は本気出すらしい。朝はもちろん太極拳。

以下、オリジナル設定

なぞの隙間使いに幻想入りさせられた。その昔化け狐に上司が誑かされて国家崩壊しかけてから妖怪狐が苦手。化け猫にもあまりいい思い出はないようだ。

仙人なため謎が多い。しかし細かい設定を気にしてはいけない。この小説は勢いでできてると思います。

## お知らせ

大変申し訳ないのですが、この作品『東方国迷譚』擬人化国家が幻想入り〜、ただでさえ更新が不定期になっていましたのにこれからさらに不定期になりそうです。

それといたしますのも、まず家庭環境の変化。詳しくは申せませんが、もろもろの深い事情などにより一旦作品を絞らなければ、と思いました。

実を言いますと、他にも別作品の二次創作を取り扱っておりまして、そちらの方は問題なく更新できるかもしれないのですが、東方の知識が少なく、なおかつ賛否両論あるであろうこの作品におきましては誠に遺憾ながらも少しの間休載とさせていただきます。

文字にできそうなネタが他に溜まりましたら折り返しを見て挙げさせていただきますので、しばらくの間はご勘弁を。

なお、お気に入り登録してくれた方。御免なさい。切るなり何なり自由にどうぞ。

それではまた、お会いできる機会がありましたら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6347n/>

---

東方国迷譚～擬人化国家が幻想入り～

2011年10月6日14時20分発行